

井上勝志 著  
『近松門左衛門』

(角川) [910 S74-A3-9]

角川ソフィア文庫ビギナーズ・クラシック日本古典シリーズ第3期刊行『近松門左衛門』、著者は神戸女子大学教授井上勝志氏である。井上氏はかつて、園田学園女子大学近松研究所(平成元年設立)所長の職にあつた方で、近世演劇研究の第一線で活躍する研究者である。

本著では近松門左衛門による浄瑠璃・歌舞伎約150作品から、5作品の名場面が取り上げられている。近世演劇初心者にもわかりやすいように、各作品について、全体の粗筋、人物関係図が示された後、紹介される名場面までの展開が平易な言葉で説明されている。

「はじめに」で井上氏は「近松は孤高の芸術家ではない。一月月に向つて吠えるわけにはいかない。演ずる者たち周りの人々と一つの芝居を作り上げ、芝居として当てなければ、ならない。(中略)数多い近松作品のごく一部分ではあるが、また、三百年前の観客たちとまったく同じというわけにはいかない

が、人形の動き・演技なども思い浮かべながら、近松の声が聞こえてくれば、幸いである。」と述べる。

著者は、近松作品を語りの詞章として読むべきことを読者に知らしめる。ビギナー達は、語りと三味線と人形による総合芸術たる人形浄瑠璃の世界へ足を踏み入れることになろう。

収載作品は、『出世景清』、『曾根崎心中』、『用明天皇職人鑑』、『傾城反魂香』、『国姓爺合戦』、いずれも近世演劇史上、意義ある作品である。その理由は本書を手にとつて確かめていただきたい。

高野和明 著  
『ジエノサイド』 (角川)

「キリンの首はなぜ長い」これは、進化をめぐる有名な問いである。「高いところのはっぱを食べるキリンの方が優位に生き延びた」という説を耳にすることが多い。そうは言つても首が長いと困る事の方があつて、あんな高い位置に頭があつて、水を飲もうとしたら、脳溢血になつてしまふやん、そうか、ついでに象みたいに鼻も長けれ

ば水飲みやすいかも。いやそもそも、あの頭の位置まで血液運ぶんやつたらグラウンデサイズの心臓か、レギュラーサイズの心臓3つくらいは装備はいる…。さてキリンの進化に思いを致しつつ、我々人間のことを顧みているのだろうか。一説によると、この先もだいたいこのままだしい。「環境の方を変えて生きやすくてから進化の必要がない」のだから。進化

### 読書案内

って、必要だから進化する！とはいかなくないか？もつと偶発的なものだという気がする。だとすると、今人間が困っていること、飢餓、病、戦争、格差や環境。このような解決したい複雑な問題を、瞬時に把握して解決できる脳を持つ人間が偶然現

れたら。その人間がたまたま一人生まれて、クローンなどで続々増えたなら。私たち古いタイプの人間は、仲良くしてもらえらるだろうか。というか、今の人類が生まれてきたころは、ネアンデルタール人とか、大きいお猿とかと、仲良くしていたのだ

この小説は、情けない理系の大学院生が主人公である。未熟な科学者である彼が、「創薬」という超難しい実験を軸に、人間の進化の物語を回転させていく。最後には彼が、「科学者としての情熱」を感じさせてくれ、胸が熱くなる。ちなみに小説中に、「鏡の国のミルクはおいしくない」理由を説明する箇所がある。これは昨年度国立大薬学部でそっくり同じ問題が出題されている。どういふことなのか

など思った人は、ぜひ読んでみてください。北杜夫 著  
『どくとるマンボウ青春記』 (新潮) [910 K37]

陳舜臣 著  
『桃源郷』 (集英社)

佐藤賢一 著  
『オクシタニア』 (集英社)

昔から、主流でないもの、マージナルなものに強く惹かれた。学校から推薦されたまともな図書など読んだ記憶が無い。ここで紹介するのも、決して推薦図書ではない。他愛のない、気楽に読める本である。まずは、北杜夫の『どくと

るマンボウ青春記』。中・高生の頃、北杜夫の繊細さと洒脱なユーモアが好きだった。おかげで旧制高校やドイツ・ロシアのロマンスに憧れ、ますます時代錯誤になつてしまひ、同世代の人と話が合わなくなつた(Suma und Drangなんて言つても通じない)。

次いで、陳舜臣の『桃源郷』。東西の交流路を舞台とした、春風飄蕩という言葉がしつくりくる歴史ロマンス。アラムートの山の老人やマニ教が身近に感じられる。元々、突厥・ウイグルあたりに関心があつたのだが、それが中近東へと西漸していき、ゾロアスターやイスラーム、更には、グノーシスなどの神秘思想にまで拡散してしまつた。困つたものである

最近の本を挙げるならば、カタリ派を扱つた佐藤賢一の『オクシタニア』も面白い。著者はまだ若い、話の展開が映画的であり、「上手いなあ」と感じる。文体も読みやすく、ほどこいお色気もべたべたし過ぎず嫌味でない。「書を捨てよ、街に出でよ」と言われて久しいが、未だに書を手放さずにいられない。仕事や充実した生活の妨げになること

はわかっているのだが…。

三浦綾子 著

『塩狩峠』(新潮文庫) [913 M38 13]

話は実際に明治期に起きた鉄道事故を基に描かれている。主人公の青年は、あたたかい家族に囲まれて育てられる。やがて、周囲の敬虔なキリスト教信者に感化され、始めは拒み続けていたキリスト教を少しずつ受け入れるようになる。そして最後は青年が「自己犠牲」を通じて、キリスト教的「愛」を実行することになる。

初めて読んだときの私の印象はとても薄い。話の大半があまりにも穏やか過ぎて、退屈だったからに違いない。いつからかわからないが、今日に至るまで、旅の際には旅先に関した本を持ち歩いて読むようにしている。小説の舞台「塩狩峠」も何度か訪れたことがあり、この小説もわかりである。幾度となく読むうちに、作者の伝えたかったキリスト教的観念に触れた気が成長したか、読解力が成長したか、それでも自分なりにうれ

連載50周年にあたる本年、また偶然にも2月の事故発生日と同日、当地を訪れる機会を得た。車窓から大人の背丈以上に積もった雪の中に小説の助けも借り、当時の光景を思い浮かべて感傷に浸っていた。しかし、その直後、暴風雪の原野に列車ごと6時間缶詰にされた。だから、そのような感傷はすぐ吹き飛んでこの先の予定変更という慌しい現実を引き戻されてしまった。

学とは何だろう?とくに北野生にとっては種々の数量を求めたり、命題を証明したりすること…といったイメージは否めないところなのかも?ところが著者は、数学とは問題を解くことではなく問題を見つけることだという。そして、数学に限らず質問自体が、問題を発見することに意義があるとしている。

私の場合、「読書」は旅行先で感傷に浸る一つの手段であり、数多くの場所を訪れる分、数多くの「本」に巡り会えるというわけである。

苦米地 英人 著 『数学嫌いの人のための(すべてを可能にする)数学脳のつくり方』(ビジネス社)

本屋で書棚を詮索して、どうにもタイトルが気に掛かり読むことになった一冊である。数学の得手・不得手や好き嫌いに関わらず、ぜひ一度読んでもらいたくここに紹介する。ところで君たちにとつて数

### 読書案内

鳥飼玖美子 著 『本物の英語力』(講談社)

北野高校生は将来、企業や研究等で英語と関わる人が少なくないでしょう。そして、その中には英語が苦手だ、好きではない人もいます。最近では英語ができないと就職や昇進ができないという企業もあります。

この本は、そういう英語が苦手だとか、好きではない人に英語学習の新たな視点を紹介し、英語を楽しみながら学ぶことを目的に書かれています。その基本原則は、ネイティブ・スピーカーを目指すのではなく、自分が主体的に使える英語を学ぶこと、英語を覚えようとせず知りたい内容、興味のある内容を英語で学ぶことです。まず、英語学習の成否を決めるのは、英語を学ぶ自分なりの目的です。英語の基礎力として、

発音、語彙、文法があります。発音は基本を押さえれば、完璧でなくてもいいです。語彙は英文を多く読む中で獲得します。文法はコミュニケーションをする上で不可欠ですので、最低限の文法事項の学習が必要です。

英語の学習法として、自分の興味がある分野で、様々な英文を音読し、訳読や多読をして内容を捉え、音声聞いて理解し、英文を書くことで、「内容と言語を統合した学習」をします。海外での英語学習を望む人もいると思います。そうするには語学研修と留学がありますが、語学研修は語学の習得が主で、留学は学問の修得が主です。

最終的に英語を使うわけですが、人によって必要な英語の力は違います。しかし、最近では仕事で海外とメールでのやり取りが多く、英語を書くことが必須です。それも、まとまった内容を論理的に書くことです。英語を学習する上で大事なものは、自分の得意分野を持ち、自分にとってどんな英語の力が必要かを見極め、自分なりの英語学習の目標を設定し、適切な学習方法を見出すことです。

---

---

---

---

---

**読書案内**

---

---

---